女方・本田前遺跡
緊急調査報告

（付　女方古墳群の現況）

平成１０年２月

茨城県下館市
下館市教育委員会

女方・本田前遺跡
緊急調査報告
（付　女方古墳群の現況）

例　言

1　本書は、下館市女方字本田前６２５、６２３番地に所在する埋蔵文化財包蔵地(本田前遺跡)の緊急発掘調査報告書である。

2　緊急調査を実施するに至った経緯は、おおむね次のとおりである。

梨園経営を主とする専業農家の神戸桂一氏(地権者)が、地域振興の一環として当該地に駐車場を新設するにあたり、周知の遺跡の取扱いをはじめいくつかの行政的指導があった。

神戸氏は小学校に在籍していたころから自宅周辺域の耕作地から多くの原始・古代の遺物を採集していたことと相俟って、昭和10年代の半ば、当該地の西方に位置する隣接域で出中国男博士が調査を行って注目された、いわゆる「女方遺跡」の発掘調査が行われていた機会に、たびたび現地に出向いて見学していた経緯があり、そのことが背景となって遺跡の学術的価値を十分に認識されていたことにかんがみて、今回、造成の行われていない野菜畑を対象にして、神戸氏の負担において記録保存の調査を行うことになった。

3　調査期間　平成１０年１月１２日(月)～１月１９日(月)

4　調査担当者　下館市文化財保護審議会委員　西 宮 一 男

5　調査関係者

(1) 下館市教育委員会生涯学習課　課長補佐 岩 崎 良 一 (担当)

(2) 調査協力員(敬称略)

神 戸 桂 一　神 戸　 章　神 戸 欣 二　高 津 六 郎

神 戸 あ や 子　神 戸 正 子　中 東 朗 子　高 津 ハ ツ イ

6　出土遺物(縄文土器細片)および神戸氏がこれまでに採集保管されていた一括遺物(石鏃・石斧類・石皿・敲石・凹石・石棒・土偶・土版など)は、氏のご好意により下館市教育委員会で保管することになった。

7　女方地区には、古くから「女方六十六塚」と呼ばれるほど塚(古墳)が数多く存在していたことが語り継がれている。しかしながら、幕藩時代の耕地拡大政策、第二次大戦中の食糧増産政策にともなう開墾地の拡大、そして、戦後における急激な開拓事業の進展、昭和30年代の半ば以降から顕著になった工場や個人住宅の建設・住宅団地造成、国道をはじめとする基幹道路の整備など、歴史の推移を背景にして社会情勢も著しく変貌するとともに都市化もすすみ、このような幾多の土地利用がもたらした結果は、往時の純農村社会の環境等を一変させてしまったことは周知のとおりである。。

周知の遺跡として扱われている「女方古墳群」も、神戸氏が子供のころには形態を整える２０余基の前方後円墳や円墳が存在していたというが、現在では３基を残すのみである。

今回、神戸氏の案内で湮滅古墳の所在地確認を行い、今後、広く郷土史料として保存活用を図るための基礎的資料として「女方古墳群分布図」を作成し、本書に収録した。

8　最後であるが、今回の緊急調査は諸般の事情で短期間の日程で実施せざるを得なかった。その間、二度の降雪に見舞われ難渋を余儀なくしたが、終始神戸氏ご家族の皆さんから懇切なお世話を頂戴した。ここに記して感謝の念を捧げるしだいである。

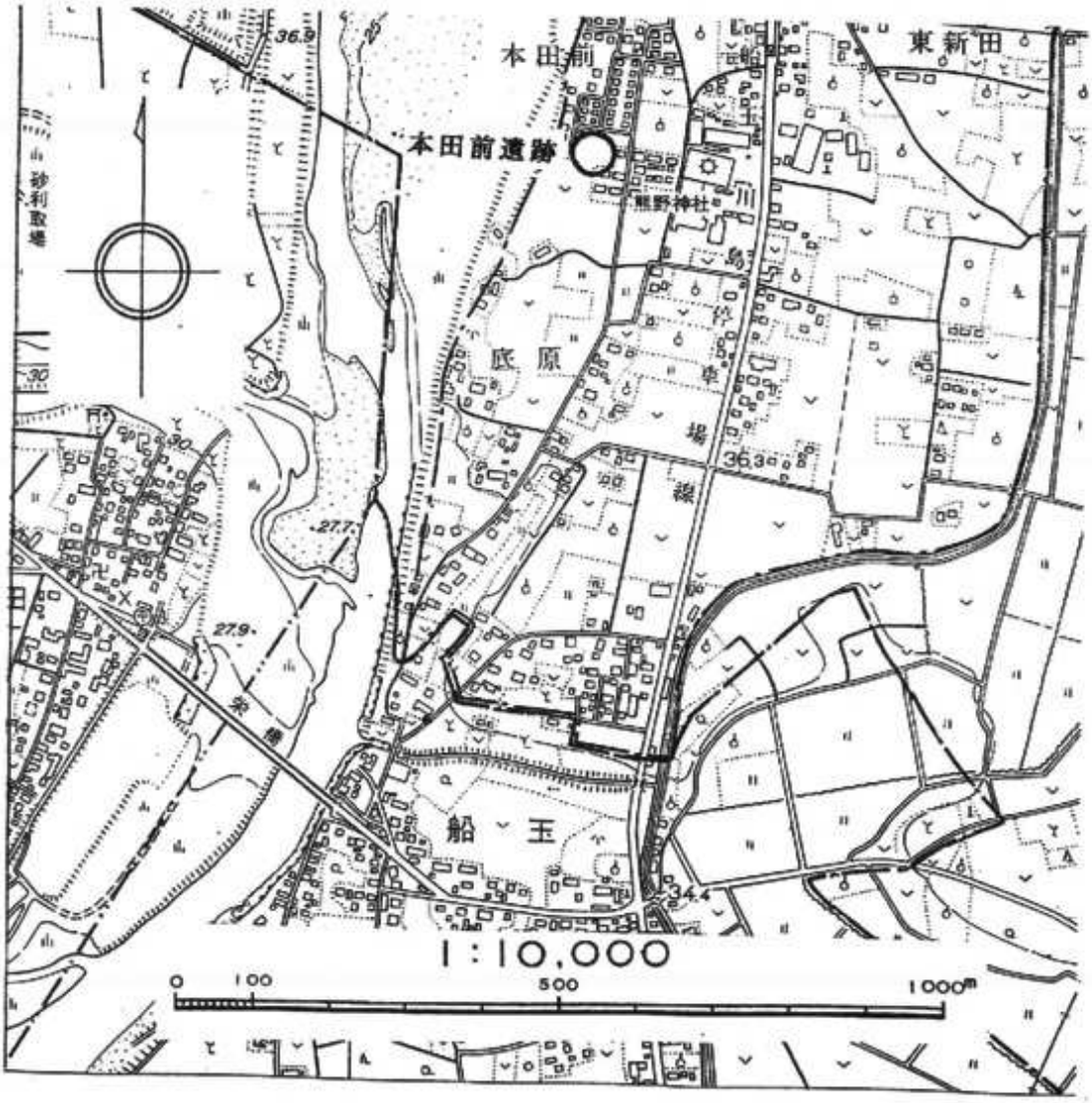
目　　次

例　言
1　遺跡の位置と現況 …… (5)
2　女方地区の遺跡の様相 …… (5)
　(1)本田前遺跡 …… (6)
　(2)女方遺跡 …… (6)
3　女方古墳群の分布と現状 …… (7)
4　女方古墳群調査の経緯 …… (8)
5　本田前遺跡の調査 …… (11)
　(1)調査の経過 …… (11)
　(2)検出された炉跡の遺構 …… (11)
6　おわりに …… (14)

挿図・図版目次

第1図　遺跡周辺地形図 …… (4)
第2図　女方古墳群分布図 …… (9)
第3図　本田前遺跡トレンチ実測図 …… (12)
第4図　炉跡平面実測図 …… (13)
図版1　女方遺跡全景・田中国男博士調査地点
図版2　調査現場全景・第1トレンチ全景
図版3　炉跡遺構検出地点・炉跡遺構全景
図版4　覆土からの出土遺物(1・2)
図版5　覆土からの出土遺物(3・4)
図版6　神戸桂一氏が農作業中に採集された遺物
図版7　女方古墳群第1号墳・第2号墳

※ 表紙の写真は本田前遺跡出土の土偶(神戸桂一氏提供)


本田前遺跡
本田前
東新田
熊野神社
底原
船玉
砂利取場
36.9
36.3
27.7
27.9
34.4
1:10,000
0
100
500
1000m

第1図　遺跡周辺地形図

1　遺跡の位置と現況

本田前遺跡は、下館市大字女方字本田前を中心にして所在する。古くから広範囲に土器・石器・骨角器・土偶等の遺物が数多く散布する地域として注目されていた。

女方地区(旧伊讃村大字女方)は旧常陸国の西端部に位置し、南流する鬼怒川の中流域をもって旧下総国と画する。鬼怒川左岸沿いに形成される台地上の女方集落の全域は、おおむね南北の方向にひろがり、標高39～37mほどを測る起伏の少ない概して平坦な耕地で占められる純農村地帯であったが、昭和３０年代後半のころから北部地区を主に各種企業がＪＲ川島駅、および国道５０号線周辺域に造成された工業団地への誘致が促進されることと時期を同じくして住宅団地、個人住宅の建設も進み、こうした土地利用による都市化の波及によって、往時の農村社会の環境と風情がしだいに失われていった。

因みに、この女方地区の変貌を構成戸数と世帯数の推移からうかがうことができる。つまり、明治30年代は38戸、明治40年代には分家を含めて42戸であったのが、約１世紀を経た現在では、戸数は正確を期しがたいが世帯数の実態は1,100をはるかに超えるものと言われる。

2　女方地区の遺跡の様相

(1)本田前遺跡

きわめて周知度の高い遺跡であった関係で、これまでに中央で活躍している多くの研究者、地元の郷土史家などによる現地踏査がたびたび行われており、その採集遺物などによって遺跡の存続・機能していた時期がおおむね把握されている。遺跡は、集落が構成された所在地については不明瞭であるとしながらも、縄文時代の草創期から奈良・平安時代にまたがり営まれていた複合遺跡であることが明確であるとともに、鬼怒川左岸台地上に存在する遺跡（埋蔵文化財包蔵地）としては広範、かつ、保存度良好な遺跡として学術的にも高い評価をうけており、下館周辺域においては、新治郡衙跡・同廃寺跡(協和町)、芦間山古墳(協和・女方後円墳)などと同様に代表的な史跡にあげられている。

これまでに刊行されている文献等に拠って、採集土器の編年をとおして遺跡の性格などを、縄文時代から順次表示しておきたい。

時　代	時　期	推定年代	土器型式	備　考
縄　文	草創期	BC7300	稲荷台式	
	前　期	BC3300	関山式	
		BC3100	諸磯式	
	中　期	BC2800	五領ヶ台式	
		BC2500	阿玉台式	
		BC2200	加曽利E式	
	後　期	BC1900	堀の内式	貝塚?
		BC1700	加曽利B式	
		BC1300	曽谷式	
	晩　期	BC 900	大洞B式	東北南部地方で発見される土器
		BC 800	安行III式	
弥　生	中　期	AD 100	女方式	再葬墓
古　墳	中　期	AD 400	不　詳	土師器・須恵器の破片

※1 縄文にある貝塚については、やや疑問を呈する遺跡の南端付近で認められたようであるが、範囲は狭小でシジミなどの淡水貝類を主とする地点貝塚の可能性が高い。最近湮滅してしまった。

※2 調査期間中、神戸社一氏のご好意で同行いただき、推定される遺跡の範囲の表土面踏査を試みたが、土師・須恵の土器片を採集することはできなかった。おそらく誤認の可能性も考えられる。

(2)女方遺跡

この名称で周知されている遺跡は、本田前遺跡の範囲内に包括される地点(区画)に所在するもので、実際に遺跡を訪れるにしても「女方」の地域は南北に広く、地理不案内の者には戸惑いを生じている向きもある。

いわゆる「女方遺跡」を弥生時代中期の祭祀跡(再葬墓)として学界に報じたのは田中国男博士であり、3か年に及ぶ発掘調査の結果をまとめられて昭和19年(1944)に刊行された『弥生式縄文式接触文化の研究』で一躍注目されるようになった。

この調査を特徴づけたのは、20m四方の範囲に40余基の小規模竪穴(土壙)から土器が意図的に埋納されたと判断できる状態で発見されたことで、とくに、壺形土器に人面を付したものが有名である。人面を付けたものは少ないが、その他に瓢箪形などをした特異な形状の土器があり、これらの土器には箆描きによる同心円文や山形磨消縄文を施した複雑な模様が注目されている。かつては「接触式土器」の代表とも言われていたが、それは縄文土器と弥生土器のデザインが融合したからである。

3　女方古墳群の分布と現状

下館市域に分布する古墳群については、茨城県教育委員会が昭和34年度に刊行した『茨城古墳総覧』に拠ると９か所17基が登録されており、その後、多少の新発見(確認)があったとしても実態に大きな変化は認められない。これを地域別に概観すると、鬼怒川左岸に位置する女方地区の３基と下川島地区の２基のほかはすべて小貝川流域に集中しており、分布現象に偏在性のあることが明確に指摘できる。古代氏族の勢力版図を物語る結果であろうと思考されるが、これらの古墳の大半が未調査であるとしても時期的には６世紀以降の築造と考えられている。

すでに触れたように、女方地区には古くから「女方六十六塚」という伝承があり、量的に加減を考慮しても相当数の塚(古墳)が女方の地に存在していたことが想像できるが、現在においては、この伝承を傍証するだけの痕跡はほとんど見当らない。

明治27年(1894)、大田村(現下館市大字大田)在住の杉山三右衛門は、県西地方に係わる各種史料を引用して旧村(現大字)単位にその沿革、由緒ある寺社、特記に値する史的事項などを克明に記した『常陸国係杉山私記』を著わしている。村によっては塚や墳墓の存在、出土品の類も含まれていて、考古学的領域にも参考となる面が多い。そこで、女方村の由来を併記する「船玉村」の項をあげておきたい。

古老伝に曰く往古当村と女方と一ケ村なりといはれ中代に南部の住居は船玉神社なるを以って船玉村と称しぬ北部居住所に結城氏別堡を築き姫方を置きし其跡に設し住居故に此女方(ひめかた)村と称しぬ其後女方(蔵書にあり)村と称しぬ其の文字を以て今をざ方村と称しぬと言いぬ附言女方村羽黒神社境内よりやのね石志また石等を出す最も人力を要したるものなるへし又当社北の方に多くの丘陵あれとも其名を知る者なし故に茲に載せす

とある。ここに丘陵とあるのは、おそらく塚(古墳)を指摘しているのであろうが、この時点においては墳墓と断言できる知見を得ていなかったのではあるまいか。このことに関連して、さらに「船玉村」の項を見ていくと、現在の船玉古墳(方墳・装飾古墳として県指定史跡)を「船玉村八幡社境内岩屋」と題して、南に開口する横穴式石室の構造や規模・石材などの法量や特徴を詳しく報じ、この岩屋の東方に高さ２ｍほどの３基

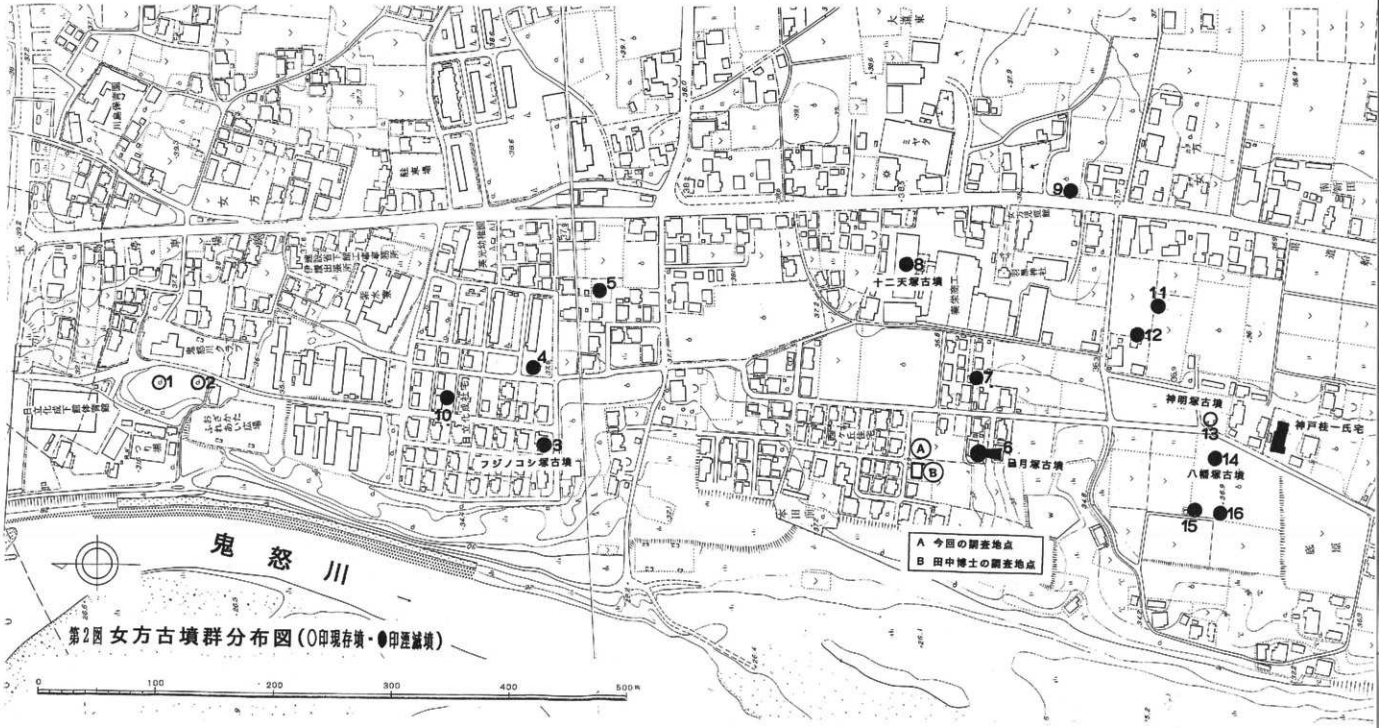
の塚の存在を併記していることは、自らが現地に赴き収集記録に基づく叙述であることは明白である。「岩屋」とは遺骸埋葬施設である石室を意味するものであり、このような事例はほかにも幾つかあげられる。たとえば、「小川村」の項に小川氏の館跡で岩屋の確認が記され、「深見村」の項では、村内に分布する数十の丘陵群のうち、明治5年(1872)に富士浅間神社境内東隅から岩屋が発見されて人骨と鉄刀の出土を紹介。また、「茂田村」の項では、明治9年(1876)に白山地内の岩屋が発見されて水晶製(水晶製の切子玉であろう)の遺品を実見している。さらに、明治24年(1891)に下館城跡御舟蔵東において岩屋の確認記録がみえる。その他、下館市外の旧村域に存在する丘陵・岩屋に関する記述が散見されるのも、計画的に踏査を試みた証であり、なによりも湮滅傾向が加速している埋蔵文化財包蔵地の現状を憂慮するとき、限られた地域に存在する、あるいは存在していた古墳群の構成範囲を掌握するのに得難い文献と言わざるを得ない。

4　女方古墳群調査の経緯

当古墳群は、昭和27年と昭和28年の2か年にわたり、日本大学考古学会によって3基の円墳を対象に発掘調査を行っている。

第3号墳(本田北256番地)と呼ばれた円墳(フジノコシ古墳)は、墳丘の直径約24m、高さ2m余を測り、墳丘南裾部から礫を小口積みにした全長約3m、高さ約70cmの規模と推定される横穴式石室を確認。石室の北寄りで人骨片と鉄器若干が検出されている。外部施設として、墳丘をとりまいて一段の埴輪列が認められている。個体数では、円筒埴輪14、埴輪馬2、人物埴輪7体分を数えるが、なかでも人物埴輪1体の頭部眉間には、あたかも仏頭の白毫を想起させる円珠が施されていて、注目されている。これをもって当墳の築造期を仏教文化の伝来との関連で比定する向きもあるが、異説もなくはない。当該地一帯は比較的早い時期に宅地化がすすみ、古墳は完全に失われている。

第6号墳(本田前644番地)と称された円墳(日月塚古墳・原型は前方後円墳)の規模は、直径約24m、高さ約2mを測り、墳頂は開墾で削平されていたものの、埋葬主体部は青白色を呈する粘土を用いて構築された粘土槨であった。墓室は東西10.2m、南北5.5mを最大径とする楕円形の土壙のなかに粘土床を



第2図 女方古墳群分布図(○印現存墳・●印消滅墳)

設け、長軸に沿って舟形の槨がつくられていた。長さ8.75m、幅1m内外、深さ60～70cmの規模であり、副葬品はわずかに小刀子の破片1点のみであった。

※ 当墳は駐車場造成予定地の南側に隣接して北から南に主軸をもつ前方後円墳であったという。調査の時点では円墳として扱われているが、調査の実施前、古墳の所在した地点の南にひろがる地形が傾斜を呈し、かつ、低かったために耕地整理上種々の支障が生じていた関係で、その対応策のひとつに前方部の盛土を掘削搬出して墳土面を全体的に盛った経緯があった。しばらくの間、後円部は残存していたが、その後、宅地に造成されて湮滅してしまった。

当墳について神戸氏の記憶を整理すると、前方部の高さは後円部と比較するとかなり低く、全長は35mほどであったらしい。形態的には未発達の前方後円墳といえる。さらに、主体部が粘土槨であることが明確であることは、古墳時代の比較的遡る時期に構築された古墳と推測が許されよう。当墳は、県内出現期古墳のひとつにあげられる岩瀬町の「狐塚古墳（粘土槨を主体部とする全長40mの前方後方墳）」の遥か西方に位置する鬼怒川左岸に構築された女方古墳群の主墳的性格を示唆する古墳と推測できるとともに、当古墳群の性格と成因の史的背景を解明するうえで、その存在意義はきわめて高い古墳と考えられる。

次に調査が行われているのは第10号墳（本田北221番地）と称された短径約13m、高さ約2mほどの円墳である。主体部は墳丘南裾部に礫を小口積にした横穴式石室で、天井は崩壊していたが、形状は長さ約6m、高さ約1.5mを測り、架構法は第3号墳に類似する。副葬品としては、金銅製素環耳飾り1、鉄片1がある。主体部の上部に玉石による葺石が確認されている。

今回、神戸桂一氏とともに行った分布調査で、所在を確認でき得た古墳は16基であったが、現存するのはわずかに3基であり、他の13基はすべて湮滅し、その痕跡すらも留めていない。

現存する古墳は女方地区北部の鬼怒川に沿う「おざかたふれあい広場」北側防風林のなかに存在する円墳2基と、本田前の糸沢定治氏宅地内に小祠を祀り保護されている円墳1基（神明塚古墳）である。

5　本田前遺跡の調査

(1)調査の経過

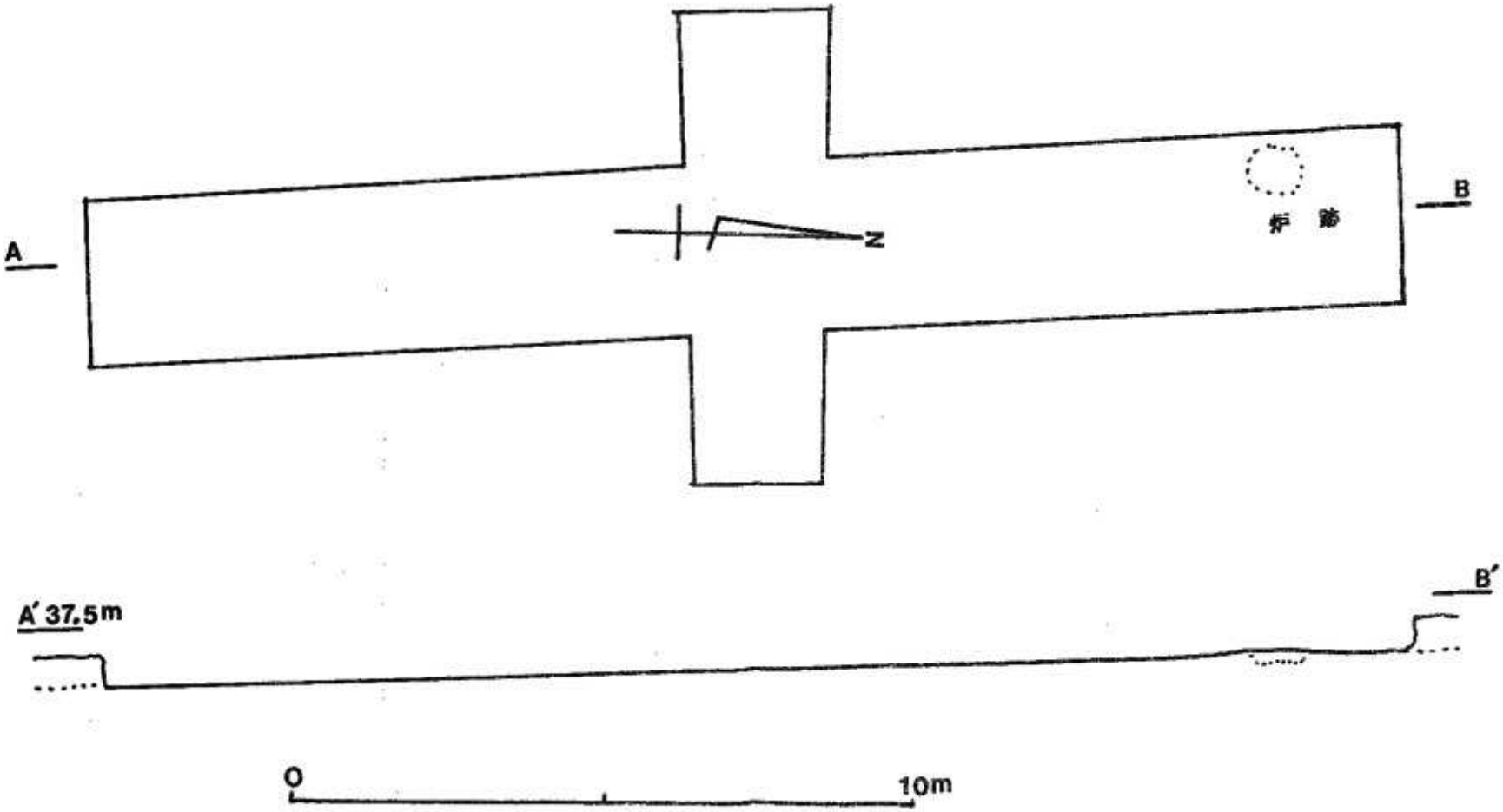
調査対象範囲は造成予定地の南西部あたり、腐植土が露呈する野菜畑に限定し、南北方向に長さ21m、東西方向に幅3mの第1トレンチを、その中央部において交差する状況で東西方向に長さ8m、南北方向に幅2.5mの第2トレンチをそれぞれ設定して表土の掘削作業を開始した。調査総面積は80㎡ほどである。

腐植土を約40cm掘り下げた地点において軟質のローム面を確認しているが、堆積腐植土の層位の識別観察はほとんど不可能であった。というのも、当該地を含める一帯は、歴史的にも良質の桑の葉を産出する地域として知られ、神戸氏宅でも先祖の代から広範な桑畑を維持管理してきたが、養蚕業の衰退の兆しが見え隠れするようになった昭和35年のころになって、神戸家でも一斉に桑の撤去が行われることとなり、抜根作業による堆積腐植土の撹乱を余儀なくした。その後、深耕作物栽培などの影響もあって、今回の調査において出土した遺物(縄文土器片と分層型石斧・石鏃等)のすべては、不本意ながら撹乱された腐植土層の中から採集したものばかりで占められている。

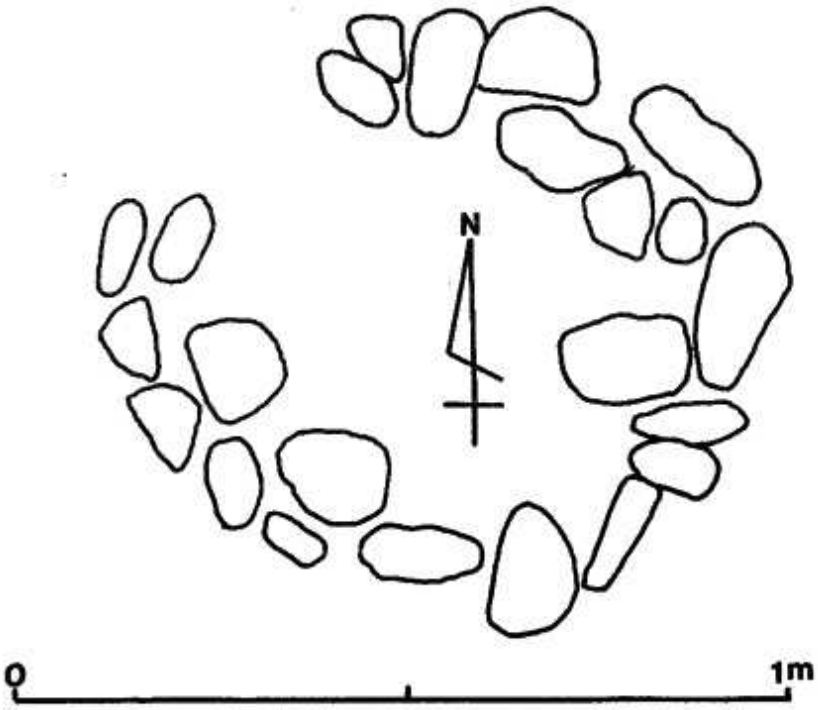
ローム面の観察では、北から南へと平坦で緩い傾斜を呈していることが認められたほか、第1トレンチ北端近くに良好な状態の炉施設が検出されている。その周辺に炉施設と共伴関係が想定されるピット群(炉をとりまく柱穴)や、第1トレンチの南側に寄った地点で、炉が機能していた住居跡に伴う側壁の落ち込み、あるいは立上りなどの遺構。さらには周溝なども確認できることにより、炉跡の時期や性格などが解明でき得るとする期待が多少はあったものの、残念ながらそれらを掌握するまでには至らなかった。

(2)検出された炉跡の遺構

炉は石囲いの炉である。検出された炉の構造は、ローム面を15cmほど掘りくぼめ、その周囲を川原石20数個を用いてほぼ円形状に一段でめぐらし、南北約90cm、東西約80cmを測る規模であったが、西北の部分で2個ほどの石が失われている。それぞれの石の表面は火熱がいちじるしく、炉跡の内部には腐植土が詰まり、最下層には焼土が堆積し、炉底も焼土



第3図　本田前遺跡トレンチ実測図



第4図　炉跡平面実測図

化しているものの、焼け具合は弱かった。炉跡に甕などの上器類を埋設したような痕跡は認められなかった。

炉跡が屋内炉として機能していたとするならば、当然のことながら生活必需施設といえよう。だとすれば、石囲いの周辺は堅く踏み固められた痕跡がローム面から看取されて然るべきかと思われる。今後の検討課題にしておきたい。

6　おわりに

今回の調査は、諸般の事情で日程と調査対象面積にいくつかの制約があり、それに加えて二度にわたる予想外の降雪に見舞われ難渋を余儀なくしたが、幸いにも神戸氏のご家族、ならびに地域社会の人々の善意に支えられ、一応初期の目的を達成し、安堵することができた。ただ、惜しまれる点は、田中博士の調査結果とは切り離して、本田前遺跡から検出された炉跡遺構の時期と性格が不明瞭のまま報文を結ぶに至ったことである。今後の検討に委ねることとはしたものの、炉跡周辺の状況を背景として、独断と偏見として受け止められるかも知れないが、ここに仮説の一端を披瀝しておきたい。

炉跡の遺構の時期の特定は伴出遺物が皆無であるために困難であるが、おそらく縄文時代の中期以降において、竪穴住居で常時使用されていた施設とは異なり、当時の人々が居住地の近くに設営をみた炉跡である可能性を捨て切れないでいる。つまり、自然現象にたいして炉の火炎を媒体とする信仰への思考形態を具現化するため、その祭祀行為に伴う屋外炉として機能していたものと思われる。いま考えることのできる対象としては、遥か南東の方向に聳える筑波の峰に霊威を意識していたとも考えられるし、眼下を南流する鬼怒川に魚介類の豊漁を祈願していたかも知れない。はたまた、神戸氏が曰く「日光連山から乗換えなしで吹き寄せる強風」とは、秋の末から春先にかけて吹き寄せる北西の卓越した強風を指しており、このような厳しい自然環境に畏敬の念を捧げるとともに、その都度、鎮静化を祈願していたことも想像できる。ここにあげたいくつかの私見は、集落の集団的秩序を維持していくうえで重要なことであり、祭祀行為そのものが強い規制を受けながら執行されていたものと思われる。

いずれにしても、各地の事例を参考にしながら、さらなる検討をすすめていきたいと考えている。

参考文献

杉山三右衛門『常陸国杉山私記』明治27年

田中国男『弥生式縄文式接触文化の研究』昭和19年

藤田　清・中村盛吉『常総古代文化』昭和26年

茨城県教育委員会『茨城県古墳総覧』昭和34年

西宮一男『常陸狐塚』昭和44年

下館市役所『下館市史上巻』昭和47年

茨城県『茨城県史料 考古資料編・古墳時代』昭和49年

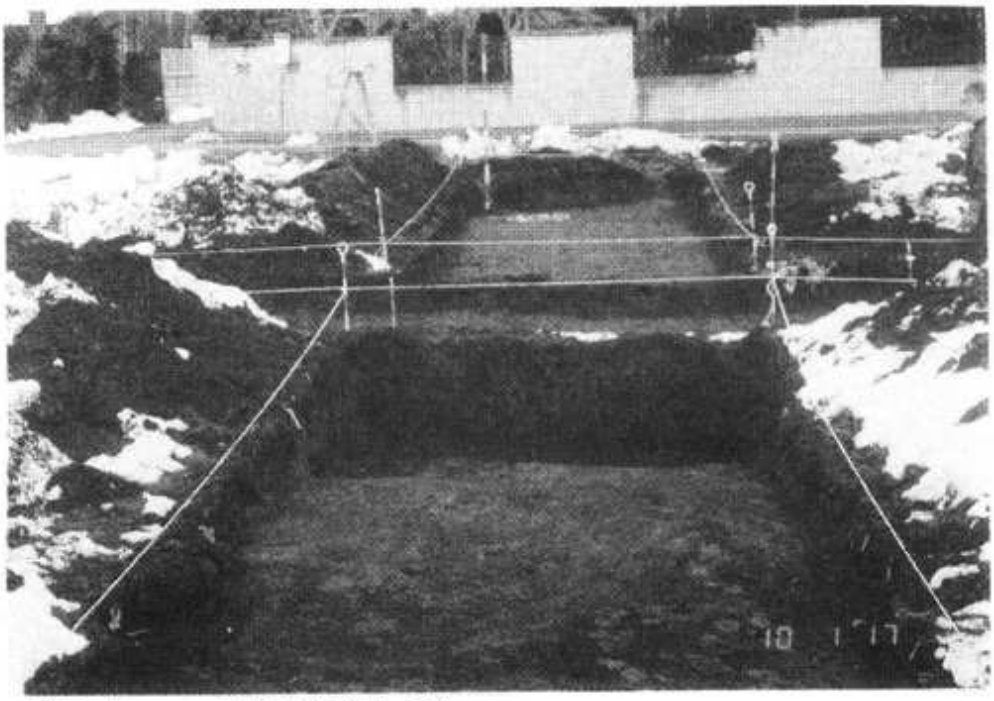
図　版

図 版 1

女方遺跡全景

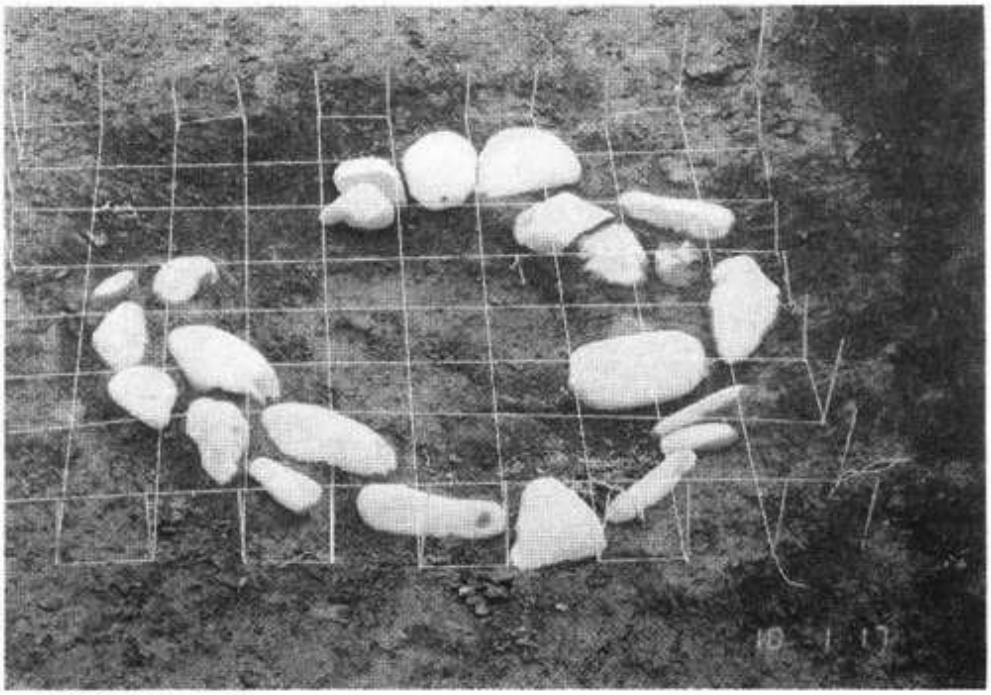
田中国男博士調査地点

調査現場全景

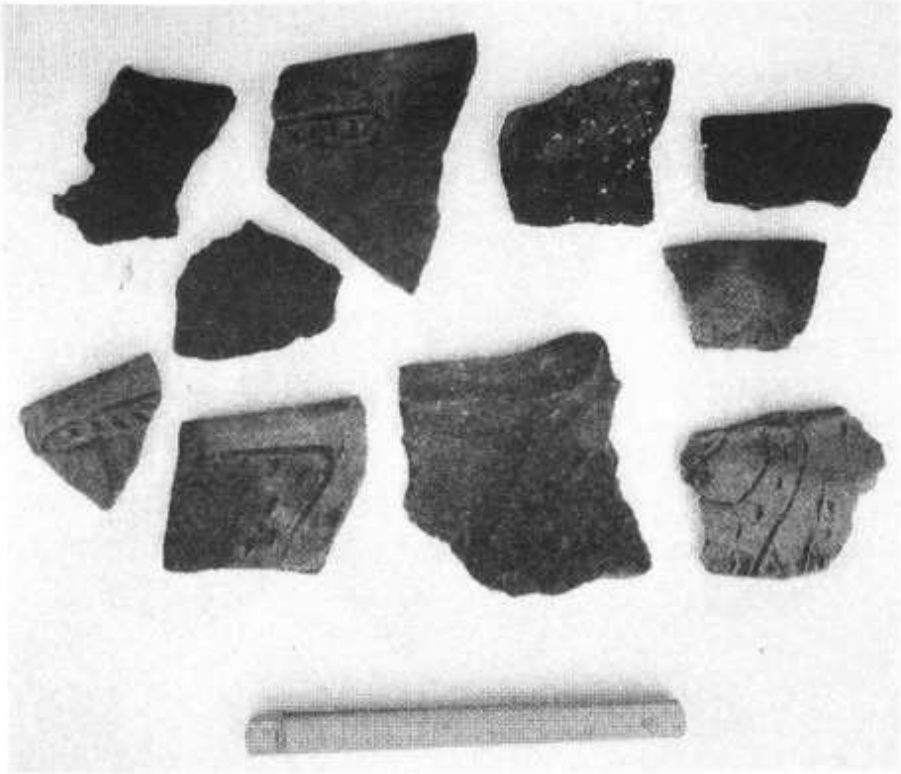


第1トレンチ全景(南から)

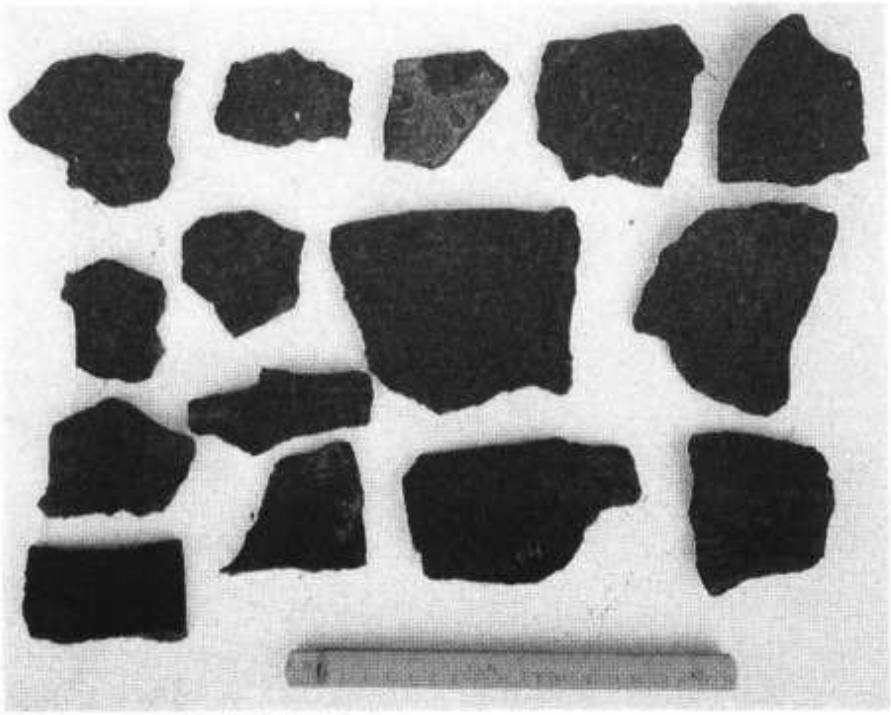
炉跡遺構検出地点



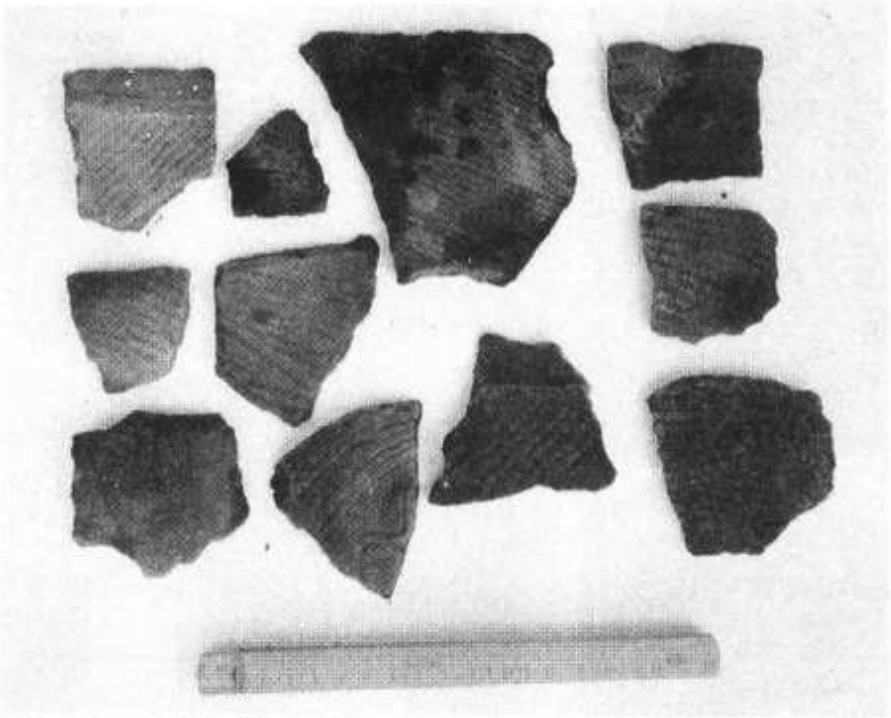
炉跡遺構全景



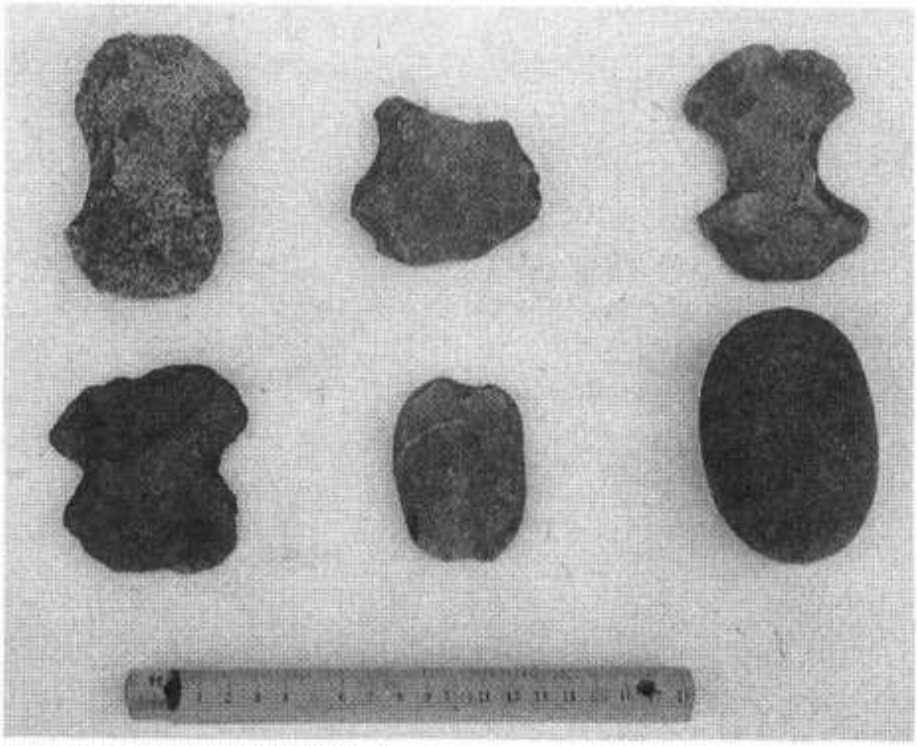
覆土からの出土遺物(1)



覆土からの出土遺物(2)

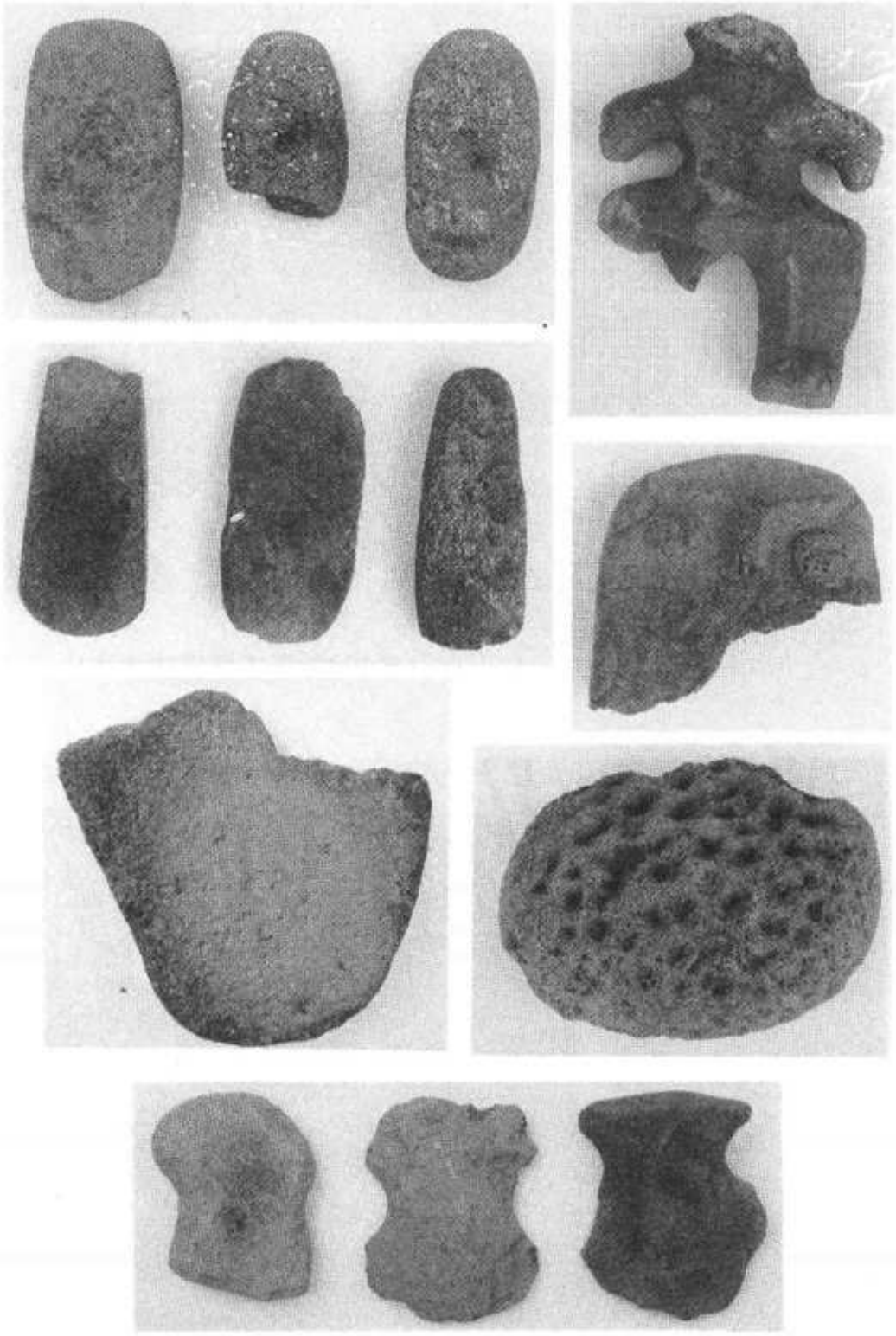


覆土からの出土遺物（3）



覆土からの出土遺物（4）

図 版 6



神戸桂一氏が農作業中に採集された遺物

女方古墳群第１号墳(円墳)

女方古墳群第２号墳(円墳)

女方・本田前遺跡
緊急調査報告
（付 女方古墳群の現況）

平成１０年２月２８日

発　行　下館市教育委員会

編　者　西　宮　一　男

印　刷　栄進堂印刷株式会社